

社会教育研究部門

「教育と公共」研究部会（第14回）

日時：2020年6月12日（金）13:00～16:20

場所：新型コロナでの自粛により、オンライン「zoom」で開催

出席：田嶋一・浅井幸子・上野正道・狩野浩二・仲田康一・藤井佳世 各兼任研究員
金沢千秋・川上智子

欠席：吉久知延所長

内容：（1）上野研究員の報告：日本語へ翻訳中の「ガート・ビースタにおける教育と公共」（Gert Biesta, *Obstinate Education:Reconnecting School and Society*, Sense Brill 2019）から、「訳者解説」の一部の紹介、報告があった

1. ガート・ビースタの紹介

- ・オランダ生まれの教育哲学者。アイルランドのメヌース大学とスコットランドのエディンバラ大学で教鞭を執り、スウェーデン、ノルウェー、ベルギーの大学でも客員教授を務めている
- ・日本で出版されている著書として『民主主義を学習する—教育・生涯学習・シティズンシップ』（勁草書房、2014年）、『よい教育とはなにか—倫理・政治・民主主義』（白澤社、2016年）、『教えることの再発見』（東京大学出版会、2018年）等

2. ビースタの教育学の内容

- ・社会で論じられるさまざまな学校の問題に対して、教育（学）の側から根本的な問いを提起
- ・デューイの教育哲学の研究に着手
- ・2000年代にはデューイから離れ、新たな民主的教育論やシティズンシップ教育論を展開。デリダ、アレント、ハイデガー、レヴィナス、フレイレ、リングス、ランシエールらの思想を取り入れる
- ・教育を「主体化」「社会化」「資格化」の三つに分類
- ・「学校はどのような社会を必要とするか」という問いを発していく

3. 9章から成る本書の簡単な紹介

（2）各研究員からの質疑応答

・次回研究会は、7月10日（金）13時から、オンラインZOOMで開催予定。報告者は浅井、藤井各研究員